

脱肉体化時代の官能的思索 — ヴィレム・フルッサー論考 (4) —

越 智 和 弘

2. ヴィレム・フルッサーとはなにか

理性の処理能力を超える人間本質の開示

本考察に先立つ前論文においてわれわれは、ヴィレム・フルッサー最大の問題作と位置づけられる著書の題名でもあるヴァンピュロトイティス・インフェルナリスという生物の実像に迫ることを課題に掲げた。そのさい、そもそもこの考察をはじめのきっかけとなったフルッサーの、謎めいていながらとりわけ西欧思想にたいしては挑発的に作用することは、すなわちこの生物を、「性を充填された理性によって思索する」¹⁾ 生命体とみなす視点が、依然として考察全体を貫くライトモチーフでありつづけることを確認した。そのうえで前論文は主に、ヴァンピュロトイティス・インフェルナリスが、そもそもどのような生き物なのかを浮き彫りにする方策として、生物種としてそれにきわめて近い巨大なタコ *Kraken* に着眼し、この存在に、科学による解明の過程と言説化される表象の歴史の変遷という、二つの対照的な領域から光を当てた。そこから判明したのは、つぎの驚くべき内容であった。

ひとつにはそれは、とりわけ 19 世紀以降になると、*Kraken* という生物に関する海洋調査や目撃証言にもとづく客観的情報がつぎつぎと明らかにされたにもかかわらず、いや、むしろそうした科学的事実の提示に反比例するかのごとく、この深海生物を、端から凶暴で理由もなく人間を攻撃する邪悪な存在だと決めつける非科学的言説が爆発的に増殖したことである。そこで目撃されたのは、科学が示す事実に関係ないどころか、まるでそれに抵抗するかのごとく、新たな神話が形成されていく過程であり、それに文学が大きく貢献した事実である。ただ、こうした神話形成の先頭に立ったかにみえる 19 世紀のフランス・ロマン主義文学が描きだす、地獄から現れたコウモリのごとき戦闘的で邪悪な大ダコの表象が生まれる背景を探るなかから、時代に特有といわざるをえないあたる心的動因が浮上する。これが、ふたつ目の驚くべき内容である。

それは、ロマン派に代表される当時の西欧知識人が、この凶暴なコウモリダコの奥に、原初的な「ドイツ」と「女性」への激しいまでの憧憬をみいだしていた事実である。つまり、巨大な軟体動物に無条件の邪悪さという悪魔的な性格を付与し、そのうえで理想化されたドイツや女性にそれを結びつけるという思考の背景には、そうした複雑な神話

形成が、じつはたんに想像の世界で戯れる文学的な産物ではなく、19世紀後半期のイギリスやフランスに支配的であった経験主義や実証主義、理性にもとづく啓蒙的道德といった、近代化に寄与する思潮にたいする強烈な反感の表明としてなされた事実が息づいている。そうなると、大ダコに付与されたデモーニッシュな表象は、たんに理性とは無縁な悪として切り捨てられうるものではなくなる。それはむしろ西欧近代が伝統としてきた理性の過信に疑問を投げかけるもの、つまりゲーテの『ファウスト』に登場するメフィストフェレス²⁾のごとく、理性や合理主義に偏りすぎた人間中心主義的な知の偽善的実態に挑戦状を突きつける存在でもある事実が、邪悪なコウモリダコに、ドイツと女性の理想を重ね合わせる過程から浮き彫りにされていくのである。そして、ここから明らかになる二つの思潮的対立構造は、もはやたんに文学的領域に閉じ込めうるものではなく、当時のヨーロッパを大きく分断するまでに高まっていた社会思想的緊張関係でもあったことが判明する。

19世紀フランスの歴史家ジュール・ミシュレとフルッサーの両者が、偶然にもともに西欧近代における「男性的世界」と「女性的世界」を、性と海洋生物を介して結びつける構想をいだいた背景には、ひとつには、この軟体動物が、カイヨワがすでに述べていたように「心の奥底にひそむ好みや、思い込みにいたる執拗な傾向を不意に呼び覚ます」³⁾ 格好の存在であったことが挙げられるだろう。そもそも「海」についてミシュレは、それを「血と乳の複合」⁴⁾ からなる「大いなる女性なるもの」⁵⁾ と想定していた。そのうえで、「女性的世界」である「海」のなかからこそ、やがて「精神」と「思索」が生まれ得る⁶⁾ とも言い切っていた。だとすれば、*Kraken* は、このように規定される「海」という「女性的世界」のいわば最も深い奥底に生きる生物だといえよう。その「不定形」で「胎児的」で「凶暴」な性格⁷⁾ からは、ミシュレが併行して憧憬の念をもって描写しつづけたドイツ人の原初的性格、すなわち「水のごとき流動性」「素朴な幼児性」⁸⁾ 「戦闘的な野蛮さ」⁹⁾ との親近性が容易に読みとれる。

ミシュレが「水のごとき流動性」、「幼児のごとき素朴さ」、さらには「女性性」¹⁰⁾ によって特徴づけるドイツは、しかしひとたび「激情と血への陶醉」¹¹⁾ を帯びると、「水のなかに漂う」状態を脱し、「真に生成しきった血」¹²⁾ を身につけ、やがて「ヨーロッパの子宮であり頭脳」¹³⁾ へと変貌する宿命を帯びるものであった。そしてこの状態こそが、ミシュレが「超セックス」¹⁴⁾ と規定するものの真の姿なのである。それは、男性的観念と女性的感情が文字どおり結合する¹⁵⁾ ことによってこそ実現しうるものであった。

ここで想起せざるをえないのは、ミシュレが描きだす「女性的な海」と「原初的ドイツ」がもつ親近性と、フルッサーが描きだすヴァンピュロトイティスの生きる世界との関係である。フルッサーもまた、この深海生物の生きる世界では、西欧的世界とは対照的に、男性的概念と女性的概念が理想的に融合することで、冒頭でみた「性の充填され

た合理的理性」¹⁶⁾ が実現されているといていた。これは、ミシュレの「超セックス」すなわち「男性的観念と女性的感情の結合」と、一定の親近性をもつものであるように思える。

ただ、ミシュレとフルッサーのあいだには、西欧近代を、女性的世界を一方的に抑圧してきた文化とみなす視点においては共通性がみいだせるものの、それぞれが批判の鋒先を向ける対象には安易に同一視しえないものがある。最大の理由は、かつてミシュレが憧憬の念をもって描きだした「超セックス」、すなわち「女性的なドイツ」が「激情と血への陶酔」を経ることで「真に生成しきった血」を身につけ、やがて「ヨーロッパの子宮であり頭脳」となるというロマン主義的な理想と、フルッサーのあいだには、20世紀前半期にその理想をまさに国を挙げた政治革命として実現しようとしたドイツが、想像を絶する破滅にいたった事実が歴然と横たわっていることにある。ミシュレは、かれが描きだした *Kraken*、すなわち「奇態で、滑稽で、グロテスクな様相を呈し」「残虐で憤怒に駆られた」「張り詰めた殺人者のごとき荒い鼻息で」「殺戮を必要とし」「満腹しきっても破壊し尽くすまでそれをやめない」¹⁷⁾ 胎児が、かれの死後半世紀あまりを経た時代に、ナチスというかたちでこの世に現実化し、ヨーロッパを殺戮の場に変えてしまうことを想像しえたであろうか。

両親から祖父母、そして妹までをもナチスの強制収容所で殺害されたフルッサーは、「アウシュヴィッツはいかにして可能であったのか」という問いに、それはまさに西欧近代という機構 *Apparat* – おそらくそれは資本主義と言い換えてもいいものだろう – が理想的に機能した時期であったからだ、と答えていた。つまり、「アウシュヴィッツ」は、西欧の歴史のなかで誤って起きてしまった例外的で特殊な現象ではなく、西欧近代そのものに深く根ざした、いわば起きるべくして起きた必然性なのだと、つぎのように言い切るのである。

どうしてアウシュヴィッツが引き起こされてしまったのか？ それから、そのあとの時代をどう生きるべきなのか？ この問いは、たんにこのできごとに、なにがしかのかたちで責任を負っている者にだけ向けられるものではない。加えてそれは、そのできごとからなにがしかの苦痛を味わった者に向けられるものでもない。そうではなく、この問いは、なにがしかのかたちで西欧社会の一員であるすべての人間に向けられているのである。なぜなら、アウシュヴィッツが前代未聞であるわけは一だからこそそれは根本から理解しがたいものなのだが – たとえそれが完璧なまでに予想を超えた結果をもたらしたにせよ、西欧文化がそれを必要とするにいたったことにこそある。¹⁸⁾

さらにかれはつづけてこうもいっている。

アウシュヴィッツは、たんに西欧的なイデオロギーや学問、テクノロジーの産物ではない。アウシュヴィッツは、西欧の基盤をなすユダヤ・キリスト教的な世界観と価値観に直接深く根ざしている。アウシュヴィッツは、われわれの歴史の創始期からすでに一たとえそれがまったく想像を絶する可能性ではあったとしても一ひとつの可能性としてわれわれの文化に組み込まれていた。アウシュヴィッツは、つねに西欧文化のなかにプログラム済みであったもの、つまりいつかは実現化されるプログラムとしてインプットされていたのである。したがって、なぜアウシュヴィッツが起きてしまったのか、という問いは適切ではない。出来事そのものではなく、われわれの文化全体が問題視されねばならないのである。つまり、いったいこのような文化のなかで、つまりそれがいかなる事態を引き起こしうるかを見せつけられたあとの時代を、われわれがどう生きていけるのか、と問われるべきなのである。

19)

以上の引用には、フルッサーが展開する思想の起点が、まぎれもなく「アウシュヴィッツ」にあったことが正直に開陳されている。そこには同時に、かれの哲学全体を貫く核心が、少なくともわれわれが生きる時代において前代未聞の革新性を帯びている理由も端的に示されている。それはなにか。ひとことでいえばそれは、「アウシュヴィッツ」すなわち「ナチス」は、けっして歴史のなかで「偶発的」に起きた「特殊」で「例外的」な現象ではなく、すでに「西欧」という文化のなかに、深く織り込み済みのものであったという視点である。こうした考え方、すなわち「ナチス」にいたる必然性が、すでに西欧近代のなかに深くプログラムされていたものだとする考え方は、じつはミシュレにおいて顕著にみられた「ドイツ」の「超セックス」としての理想化をみるまでもなく、19世紀から20世紀にかけて西欧を支配していた、イギリスやフランスの価値観への危機感をいだけ一部の知識人のあいだでは、複雑な心境としてではありながら、広く共有されていた可能性が高い。

そうした観点からすれば、20世紀の前半期にドイツで起きたことは、いってみれば、ふたたびフルッサーのこぼを借りると、「西欧文化に内包されており、やがて歴史の経過とともに必然的に明らかになるプログラム」の、壮大な「実験」であったといえるのかもしれない。やがて現前化する宿命にあった西欧文化に組み込まれた「潜在的可能性」が、多くにとって「まったく信じがたい結末」を迎えた事実は、それがまさに理性の処理能力を超えているが故に、依然として「理解不能」²⁰⁾な領域に封じ込められたままだといえる。結果として実際に起きた過去の処理は、安易な逃避以外の何ものでもな

かった。そこではナチスがもたらした結果を、理性の処理能力を超えるものとして真正面から受けとめることを避け、逆にいまだ理性によって断罪しうる犯罪、つまり「正常な」人間であれば犯すはずのない行為として処理してしまおうとする態度であった。その意味において 20 世紀後半期以降のわれわれが生きてきた時代は、理性を超えた現象を抑圧することで生まれた「虚構」、すなわちナチスの崩壊を起点に新たに構築された「神話」を、世界の大半が信じ込まれるという奇妙な時期だったともいえよう。だからこそ、フルッサーはつぎのようにもいうのである。

その出来事は未消化なままである。なぜならわれわれはそれを真正面から直視することができない。つまり、アウシュヴィッツがルール違反による犯罪ではないこと、そうではなく、まさにわれわれの文化が定めたルールを徹底して適用した結果によってこそ起きたのだという事実とまともに向き合う能力を有しないからである。[中略] アウシュヴィッツは、西欧の最も優れたモデルにしたがって生みだされ、そして機能した、完璧な機構だったのである。²¹⁾

フルッサー哲学の核心

以上に概観した作業を下地に、やがて『ヴァンピュロトイティス・インフェルナリス』に結実していくフルッサーの思索活動が、現代を生きるわれわれに、斬新な光を放つ理由を明らかにするためには、多少大胆ではあれ、ここでフルッサー思想全体の核心をなすポイントを、総括的に示しておくことは有意義なことであるように思える。

フルッサーの思索は、現時点でつぎの四つに大別されると考えられる。

1) 【文字言語から電磁化された数学的世界へ】

西欧の歴史的世界、すなわち近代以降において顕著な文字言語 (die Schrift) — 当然ながらその背後にはユダヤ・キリスト教的唯一神によって与えられたロゴスとそれを支える理性の長きにわたる伝統があるのだが — を唯一の拠り所に世界を把握してきた時代は、いまや終焉を迎えつつある。代わって登場しつつあるのは、コンピューターの飛躍的発達によるビットからなるアルゴリズムが生み出す電磁気的な世界である。そこから生まれる新たな人間関係は、いまだ不透明な過渡期にあるため、変化の規模がそれとして実感されることは少ないが、フルッサーは、それは人類がかつて鉄を発見した時に匹敵する、絶大な変革の徴候だとみなしている。

フルッサーは『主体から投影へ—人になること』のなかで、(アルファベット) 文字から数字への情報伝達の符号的変換が絶大な転換を意味すると論じたうえで²²⁾、その理由を、15 世紀の枢機卿で哲学者であったニコラス・クザーヌスが『学識ある無知につい

て』において唱えた、思考を数学化する考え方を引き合いにだしながら、この時期を起点に人間が、神に一方的に服従するのではなく、物をそれとして精密に観察する術を手に入れたことにある、と述べている。

なぜそういえるのか。フルッサーはその理由を、西欧のキリスト教文化のなかでは、神の教え（＝法則）が文字言語によって伝達可能なものへとコード化されてきたのたしいし、自然の法則は、アルゴリズム＝数的計算法によってのみ伝達しうるものへと変換できることにみいだしている。より噛み砕いていうと、神の法則＝掟は、罪だとされること（Sünde）を犯すことで打ち破ることが可能だが、自然の法則はなにものによっても打ち破ることはできない。できることは、テクノロジーの助けを借りて、それに変化を加える（biegen）ことだけである。この理由から、「罪」を犯すものは、キリスト教的に植えつけられた罪悪感によりつねに恐れをいだくなかで生きてきた一方で、テクノロジーを推進しようとするものは、「進歩」にひたすら信頼と期待を寄せてきたのである。しかしこの問題は、ルネサンス以降こんにちにいたるまで、長いあいだ未解決のままにおかれてきただけでなく、今日的視点から眺めると、そこには重要な実存的な問題がみいだせるとフルッサーはいう。なぜなら、神の掟は破ることが可能な一方で、自然の法則が、人間の手では破りようのないものであるとすれば、そもそも科学的進歩によって人間が「解放」されるなどなぜいえるのか、という疑問がつねに残ってしまうからである。その意味で、「自由」への希求という観点からみると、ルネサンスは、きわめて不十分な回答しか導きだしえなかったといわざるをえない、とフルッサーは結論づける。

23)

われわれは、これまで神の掟であれ自然の法則であれ、それらがことば（＝文字言語）によって規定しうるものだと信じて生きてきた。それは実のところ、われわれ自身が法則の主体として生きてきたのではなく、すべてがことばが投影するものによって支配される「投影された存在」としてのみ世界を生きてきたことを意味している。フルッサーは、「人を殺してはならない」ということばが言語的文法によって支配されるのにたいし、自然落下はなぜ数学的法則によって支配されているのか、という問いを立て、その真の答は、人間が数値的アルゴリズムの世界への転換を成就させることで、「文字言語」の投影から解放される可能性を手に入れられたときにはじめてみいだせる、と主張するのである。

2) 【コンピューター文化が理性による偶発的暴力を抑制する】

当初は高度な数学的解析を行うことを目的に開発されたコンピューターが、予想をはるかに上回る規模でその可能性を拡大したことにより、人類は、これまで未体験なコミュニケーションのあり方や世界観を生みだしつつある。フルッサーは、こうしたコン

コンピューター・メディアの発展を、機械によって人間性が奪われるなどといった、ポストモダン思想にありがちな文明悲観論的立場からはとらえない。逆に、こうした発展により、人類—とりわけ西欧人—が、アウシュヴィッツやヒロシマによってその極限を体験した、人間の限度を知らない暴力性、いいかえれば、理性=ロゴス=文字言語によって生みだされる惨劇の連鎖から人間がはじめて解放される可能性を、人類史上初めて手に入れたのだと、むしろ肯定的にとらえている。

こうした「文字言語」に基づくいわば直線的な歴史的世界から、コンピューターの生み出す数学的図画的世界へ脱皮しつつある時期にわれわれが生きていることとの関連において、フルッサーはあるインタビューのなかで、ヴァンピュロトイティス・インフェルナリスという生物のなかに、現代のわれわれがおかれている状況がみごとに映しだされているとし、その理由を、つぎの四点から説明している。²⁴⁾

①〔化けて欺く (trügerisch, lügnerisch) 存在である〕

(西欧の) 神話によると、タコ類は不誠実で人をだます存在である。からだから液体を放出することで、みずからや敵の姿を模倣しもする。それはちょうどボードリヤールが『シミュラクルとシミュレーション』で論じたように、オリジナルとコピーの区別が消失し、コピーが大量に消費される現代社会に呼応している。ヴァンピュロトイティスは、フルッサーによれば、「非物質的なシミュラクルを駆使する術 (Kunst) をわきまえた生物」なのである。

②〔発光器官を備えている〕

ヴァンピュロトイティスは、脳から発するみずからの意志で自在に発光したりからだの色を変えたりすることができる。そのことからこの動物が、光と色をもちいた言語をもっていることが想定される。これは、現代の人類が駆使しはじめた「電磁気によるコミュニケーション伝達手段」と相関関係にある。

③〔口と肛門が、区別が付かないほど接近している〕

口と肛門の接近性は、現代の消費社会を象徴している。消費社会における人生の目的が、口と肛門の同一性にあるのだとすれば、この生物は、ある意味でひたすら盲目的に消費に邁進する現代人のモデルをなす。

④〔人食い人種的な残虐な性格をもつ〕

ヴァンピュロトイティスは、敵や互いに限らず、自分自身をも食い尽くす性格を有した珍しい種である。「(その意味で) 私がなぜこの動物に惹かれたのかを理解するうえで、わざわざアウシュヴィッツやヒロシマを例にだすまでもないでしょう」²⁵⁾ とフルッサーは述べている。

3) 【存在認識が異なる文化の共時的存在がもたらす危機】

フルッサーは、かつてハイデガーが『存在と時間 (1927)』のなかで示したように、人間の存在認識 (= 現存在 Dasein) が時間性 (Zeitlichkeit) をとおして初めて可能になるのだとすれば、現存在が投げ込まれ (entworfen) た時間性への認識がたがいに異なる文化圏、いいかえれば歴史的な発展過程が大幅にずれた第一世界と第三世界が、現在地球上に同時に存在していることがもたらす可能性を問題視する。そこで特徴的なのは、歴史的認識をめぐる時間性が大きくずれていることから現存在としての自己認識がそれぞれ別世界にいるほどに異なる人びとが地球上に同時に暮らしていながら、そのどちらもが、人類がかつて経験したことのない電子的情報化の波にさらされていることである。その結果起きる初期的現象をフルッサーは、「集中化」と「分散化」という、いつてみればベクトルが互いに逆方向を向いた傾向として分類している。²⁶⁾ これはどういうことか。

まず「集中化」について彼は、こんにちの社会においては、あらゆるものが束ねられ、この束ねられ統合されたものに決定機構が集中する傾向が進行しつつあるという。²⁷⁾ しかしそれと同時に、集中化にまったく逆行する傾向もまた新たに生まれてきており、それは集中化の力をいまや陵駕するまでになりつつあるという。これが分散化である。この傾向は、集中化とは逆に対話への転換を生み出すことで、集中化された決定機関が、こんどは小さな核のごとき無数の決定機関へと分散することを意味する。

この傾向は、たんに権力を無効化するだけでなく、公共空間と私的空間の区別を消し去ることによって、国家の概念そのものを崩壊させてしまう。そうなると、もはや公共の空間というものはありえなくなる。なぜならば、それらは視覚化しうるのであれ不可視なものであれ、すべてが情報を伝達する配線によってリンクされてしまうからである。しかし同時に、私的空間もほとんどないに等しくなる。なぜなら、この配線は、ありとあらゆる方角から双方の空間に入りこんでしまうからである。²⁸⁾

新たに生じつつある私的なものと公的なものとの境界の消滅は、経済と政治の境界が消滅することをも意味し、それによって決定機関の細分化は容易に加速されることになる。このテレマティーク的傾向がやがて定着するようになれば、そこから予想されるのは、全体主義的にプログラムされる世界よりは、むしろそれとはまったく逆に、細かく分化した決定機関のネットワーク網からなるモザイク的な世界である。そこに出現するのは、選挙によってえられた代表者の存在しない直接民主主義であり、それは、ちょうどかつてルソーが構想した「国家なき国家的存在理由 *eine raison d'état ohne état*」

のような、サイバネティクス的に合意形成がおこなわれる民主主義だというのである。

こうした傾向が進展しつつあるなかで、フルッサーは、将来予想しうる世界の形態を、三つの可能性にまとめている。ひとつは、コンピューター・メディアにより、まったく新たな段階への移行途上にある第一世界の文化が、第三世界からの蜂起によってその芽を摘みとられてしまうというものである。ふたつ目に考えられるのは、全体主義的なファシズムへの傾向が強まることである。そして三つ目は、コンピューターに依存した株式市場に起きた突然の世界的暴落にみられるような、たがいに関係なく自律的に発生したかにみえる多層的なシステムが、ひとつひとつはあらゆる点で矛盾し合いながらも、それでいて一つの合意へと収束していく状況である。フルッサーは、これら三つの可能性のうち、もっとも起きる可能性が高いのは、ひとつめの、第一世界が第三世界からの侵略をうけ、いまだ芽を吹いたばかりの、新たなコンピューター・テクノロジーの段階へ向けた移行を模索しつつある第一世界の息の根が止められてしまう危険性だという。²⁹⁾なぜそういえるのか。

まずフルッサーは『歴史後の世界』の結末部で、起こりうる状況をつぎの短いことばでまとめている。

歴史後の世界がいまや台頭しつつある。それは二つの形態となって台頭しつつある。ひとつは、プログラムに支配される機構の愚かさであり、いまひとつは、その機構を破壊しようとする野蛮な者たちの愚かさである。³⁰⁾

「愚かさ stupidity」についてフルッサーは、かつて16世紀西欧が体験した中世の神話的、神秘的な世界からの脱皮を、いままさに経験しようとしている第三世界と、理性を旗印とする文字言語が支配する「歴史的世界」からようやく脱皮しつつある第一世界が、共時的に地球上に存在していることによって引き起こされるものと規定づけている。³¹⁾一方で、西欧をはじめとする第一世界は、コンピューターという電磁場が生み出す新たな機械をとおり、伝統的な国民国家の境界を容易に無化する情報の高速流通という手段を手に入れたことで、これまで理性＝正義の名のもとに行使される暴力に満ちた「歴史」から、はじめて解放される道をみいだした。つまり画期的転換期にありながら、いまだその真の可能性を模索中であるため脆弱な過渡期にある第一世界は、かつて第一世界がちょうど5世紀ほど前に経験した「歴史的世界」の幕開けをいまようやく体験しつつある第三世界からの侵略をうけることで、新たな「現実」を定着させられるまえに、ふたたび「歴史的世界」に引きずりもどされてしまう危険性が高い³²⁾、とフルッサーは警告するのである。

かつて第一世界が16世紀以降に体験した脱神秘化と再神秘化の激烈な葛藤を、いま経

験しつつある第三世界の、再神祕化を求める反動的な侵略の波に、第一世界がさらされているという、フルッサーが訴える問題性を正しく理解するには、かれが『歴史後の世界』のなかで、しばしば誤解されているものとして、つぎのように強調する「新しさ」と「若さ」³³⁾の違いを確認しておく必要があるだろう。

第一世界は、新しさの台頭によって特徴づけられる。第三世界は、第一世界と比べた場合、それは若い社会だといえる。第一世界のなかでは、かつてみたこともない新しい思想、行動様式や世界観をもった「新しい人間」が登場しつつある。第三世界において社会を基調づけているのは「若さ」である。第一世界は老齢化している。それは、第三世界が目下体験しつつあるさまざまな段階を「すでに」体験してしまっているからである。第三世界は古代的である。それは、いまだ第一世界が到達した段階にいたっておらず、第一世界においてはすでに達成済みの諸段階をいま再生しようとしているのである。³⁴⁾

4) 【芸術の技術的領域と経験的領域への分裂】

フルッサーは、こんにちにいたっても旧態依然とした彫刻や絵画などの伝統的手法をもちいることで、永続性を求める芸術行為にたいし、手厳しい批判を加える。そもそも芸術は、非物質的な情報ネットワークに吸収されるべきものであり、そこでは、旧来からある芸術の作品概念も、また、真理を現出させるなどという名目で永続性を創りだそうとする芸術家のステータスもまた消え去るべきだと唱えるのである。では、代わって芸術は、どうあるべきだというのか。かれは、芸術は、むしろ集団的で匿名的な生産へと転換されるべきだと主張する。³⁵⁾これはなにを意味するのか。

まずフルッサーは、そもそも芸術について、それは、広く人間が創造力によって「世界に変化を加える行為」³⁶⁾だと規定する。その視点に立ったうえで、芸術がおかれた現状を批判する根拠を、つぎの二つの点から説明する。まずひとつ目の大きな問題をかかれは、西洋の芸術が「クアトロチェント」を機に、かつて有していた理論的認識にもとづく側面を放棄し、もっぱら芸術家個人のインスピレーションや直感といった非合理的な経験値に一切がゆだねられるものへと変換されてしまったことにみいだしている。

芸術の認識をよりどころとする側面は、技術と呼ばれるようになる一方で、経験値にもとづく方、つまり、インスピレーションや直感をよりどころとする側には、ベンヤミンがいう意味でのアウラが付与されることで日常生活から切り離され、美術館へと追いやられてしまったのである。創造性、すなわち新しい形態を生み出す行為は、いわゆる芸術と呼ばれる領域よりは、むしろ学問と技術の領域において、は

るかに規律をもって、速いスピードで発展していった。人間がもつ創造的能力の証をみたいのであれば、偉大な芸術作品などよりは、しごく普通の自動車を眺めた方がよほど適切なのである。³⁷⁾

フルッサーは、芸術を創造性という観点から眺めた場合、それが認識の世界から切り離された15世紀を境に、真の意味での創造性が失われてしまったとみなす。³⁸⁾これは既成の芸術概念にとらわれた見地からすれば、にわかには受け入れがたい考え方もしてない。しかし、フルッサーが西洋の芸術史における決定的な分岐点として問題視するクアトロチェント以前と、それ以降の芸術を比較してみると、なるほどかれのいわんとしていることの正当性が浮かび上がってくる。

フルッサーは、クアトロチェント以前と以降では、そもそもなにが異なっていたといっているのか。それは、一般にそれ以前の時代においては芸術が、作品を生み出す芸術家の名においてではなく、芸術の存在そのものにおいて重宝されていたのであり、これにたいし、クアトロチェント以降の時代になると、制作者である芸術家の名声の方が、作品そのものよりも価値評価をくださす場合に大きな意味をもつようになったことにおいて、決定的に異なっていたというのである。おもえば、ドナテロ、ボッティチェリ、ラファエロ、ミケランジェロなど、イタリアルネサンスを広く世に知らしめた芸術家たちは、みなこのクアトロチェント期をはさんで生まれていたことがわかる。それに比べクアトロチェント以前の時代に遡ると、創造された絵画、彫刻、建築物は、たしかにその存在自体の偉大さが評価されることはあっても、それらの作者がだれであったかは、多くの場合知られていないか意識されない場合がほとんどである。

こうなると、たしかにフルッサーがいうように、クアトロチェント以降、芸術に向けられる人びとの目は、実際のところ作品そのものよりはむしろ芸術家の名声へと大きくシフトしたことがわかる。そしてこのパラダイム転換は、以降それがしごく当然のこととみなされるようになったため、一般にはほとんど意識されないものでありながら、こんにちにいたるまで、われわれの芸術的価値観を支配しているといわざるをえない。なぜそのような転換が起きたのだろうか。その詳しい分析は先にいっておこなうこととし、ここではひとまず15、16世紀にかけ、やがておとずれる近代資本主義の整備に向けて西欧社会で起きた宗教・政治的な整備とならんで、じつは芸術の領域においても重要な転換がなされた可能性があることを指摘しておこう。クアトロチェント以降、周知のごとく貴族や大富豪らは、「天才」すなわち芸術的才能を有する人間に無類の価値をみだし、自分たちの名声の証としてそうした特定の芸術家を重宝するようになる。時の権力者の庇護のもとに特権的な地位を与えられることで、やがて芸術そのものからは離脱したもののとして、権力者が評価し庇護する芸術家の「天才性」や「才能」に価値がみいだ

され、それら「評価される芸術家」が生み出す作品に商品価値が付与されることで、芸術にもまた資本の交換価値へと変換しうる道が開かれたのではないだろうか。

ここでフルッサーの批判的意図をさらに理解するために、クアトロチェント、すなわちヨーロッパの15世紀に、いまひとつ別の角度から光を当てる必要がでてくる。じつはこの時代は、はるか北方ドイツの修道院図書館に長く埋もれていた古代ローマ時代の哲学者ルクレティウスの著書『物の本質について』が、人道主義者ポッジョ・ブラッキオリーニによって発見された時期とも重なっている。³⁹⁾ 1417年に発見されたこの書物の内容が、じつは当時のポッティチェリをはじめとするルネサンス諸芸術家から、ガリレオ、トーマス・モアー、ジョルダノ・ブルーノらの自然科学者や哲学者らに衝撃をもって受けとめられ、さらには後世においても、ニュートンからトーマス・ジェファソン、ダーウィンからアインシュタインにいたるまで影響を与えつづけたことは、近年ステイーヴン・グリーンブラットによって詳しく論じられている。⁴⁰⁾

ルクレティウスの書は、まさにクアトロチェントの時代に、ヨーロッパ中世を長きにわたり支配してきたキリスト教の神的秩序、つまり、死後に天国に召されることを唯一の目的にした、現世を苦難の連続ととらえる否定的死生観から離脱を図ろうとしていたルネサンス期の人びとにとり、まさに進むべき道を照らし出してくれるものであった。なぜか。その理由は、『物の本質について De rerum natura』のドイツ語訳に Welt aus Atomen という副題が付されていることに端的に示されているように、この古代ローマの哲学者が主張する内容が、世界はひとりの超越的な神の手による産物なのではなく、人間を含む宇宙の万物は、そのすべてが「原子」という同じ最小単位の物質の構成から成り立っており、神が宿るとすれば、それはその原子そのもののなかにこそ存在する、と主張するものであったからである。さらにルクレティウスはそこからさらに踏み込んで、現世の喜び、とりわけ性をめぐる官能性について、それを罪への不安や天罰への恐れなしに、自然に、つまり過剰な放埒に走ることなく享受すべきだと説いたのである。これが、当時の、そしてじつはその後の時代においても、キリスト教会権力者からすると、大きな脅威として映ったことは想像に難くない。

原子論とも汎神的宇宙論とも呼びうるルクレティウスの思想が、西欧近代におよぼした計り知れない影響については、ここではこれ以上立ち入らないが、ひとつだけ指摘しておくべきことがある。それは、16世紀以降の西欧を眺めると、ルクレティウスの説が、禁止と容認という、ふたつの領域にはっきりと分離されたうえで受け容れられていった事実である。そしてこの奇妙で偏った受容のされ方こそが、先に紹介したフルッサーがこんにちの芸術のありようを批判する根拠をなしている。近代の幕開け期以降、ルクレティウスが唱えた原子論にもとづく考え方は、自然科学の領域においては、いやじつは科学の領域においてのみ、神的世界から事実上離れた、観察と実験にもとづく客観的モ

デルの形成とその合理的な継承というかたちで発展していくことを許された。しかし、ひとたび人文学の領域に目をうつすと、ルクレティウスの考え方を真剣に継承しようとした哲学者ジョルダン・ブルーノが、1600年にローマで公開の火あぶりに処された事実により端的に象徴されるように、真の意味でのキリスト教的な超越の唯一神からの「脱神秘化」は、その後の時代において、いかに啓蒙や理性と合理主義が声高に語られようと、それは依然として、この時期以降発展の道を歩みはじめる資本主義にとって都合な範囲においてのみ許容されるという、厳しい管理下におかれることになったのだと考えられる。

その証拠に、ルクレティウスが『物の本質について』のなかで、原子論にもとづいて本当に提唱したかったこと、すなわち現世におけるあるがままの性的官能性の享受については、それは資本の合理化にとってきわめて不都合に作用するものとして、少なくとも20世紀後半期の、いわゆる「性の解放運動」が起きるまで、道徳的規範として厳しく拒まれつづけてきた。さらにいえば、この「性の解放」にしても、実際にはそれまで困難を極めた「性の資本への取り込み」を、ようやく可能にする必然性が生じたために起きたものである可能性が高い。なぜならこの時代以降、性は商品化しうるセックスへと還元され、創造性に結びつく官能性については、「解放」どころかますます社会から消し去られてしまったことが歴然としているからである。そしてこの点にこそ、まさにフルッサーが芸術に批判の矢を浴びせる真の根拠がみいだせる。なぜなら、世界を科学的に認識するうえで起きた、「科学」と「文学」の近代的な二枚舌的分離という歴史的事実は、芸術 Kunst が「技（わざ）」から切り離され、「才能」や「経験値」からなる神秘性をおびた商品価値へと変換されてしまったがために、その真の創造性を失ったのだと批判するフルッサーの見解とみごとに符合するからである。

そしてまさにこの視点に立ったうえで、フルッサーが現代芸術を批判するふたつ目の観点がはじめて理解される。それは、芸術が才能や直感のみをよりどころとすることで失ってしまった真の「創造性」を取り戻すには、これ以上旧来の伝統的な手法にこだわってはいならないという主張である。そのために芸術が取り込むべき方法としてフルッサーが提唱するのは、自然科学のなかでもとりわけ電磁気学とバイオテクノロジーに焦点を当てる考え方である。かれは、そもそも永遠性を求める芸術は、熱力学第2法則（エントロピー）に反していると述べ、それをつぎのように説明する。

こんにち、芸術の永遠の価値を、石や油、あるいはその他の物質によって創りだそうなどと考えることは、話にもならないほど馬鹿げた行為である。なぜなら、ひとつには、われわれはそこに込めうる情報を、一方では電磁場に置き換える方法を手に入れており、それによって情報を思うがままに、また実際に永遠に再生しつづける

ることが可能になったからである。他方において、われわれはバイオマスという物質をあつかうことができるようになっており、それによって情報を非常に長いあいだ保存することができるようになっただけでなく、それに変化を加えることも可能になった。これら、つまりバイオテクノロジーと電磁場こそが、人間の創造性が直面する二つの挑戦なのである。⁴¹⁾

こうした立場からフルッサーは、バクテリアのことを真剣に研究することもせず、いまだ旧態依然と石を彫ったり、情報を電磁場に変換することを考えずにカンヴァスに油を塗りつけたりしているようでは、そうした芸術行為は、創造的観点からみた場合、技術的にも戦略的にも、「不必要な貧困化につくすだけ」だという。クアトロチェント以降、真の創造性が「技術」から切り離されたことで、才能やインスピレーションなどという「神の偶発性」にゆだねられ貧困化していったのにたいし、メディアテクノロジーとバイオテクノロジーからなる「新たな技術」には、「創造性をつくりだす」ことが大いに期待されるため、それを使わない手はないという。

フルッサーは、かつてロマン派が、芸術は生命を創造する行為だといったことを引き合いにだし、当時は隠喩的な意味でもちいられたその行為が、こんにちでは、本当に生命を創造しうる「芸術」を、人間は手に入れつつあるのだとつぎのように述べている。

そうなると芸術は、神と競い合うことができるようになるだけではない。神より上手にできるようになるのである。なぜなら、神が創造性に関し偶然の原則をもちいたのにたいし、われわれは意図的かつ自在にそれを操作することができるようになるからである。それによって、われわれは進化を速めることが可能になり、また、これまで起きてしまった数多くの過ちを回避することができるようになるのである。

⁴²⁾

[本論文は、科学研究費 基盤研究 (C) 課題番号:26370163 の助成を受けた研究成果の一環として公表されるものである]

註

- 1) Vilém Flusser/Louis Bec, *Vampyrotheuthis infernalis – Eine Abhandlung samt Befund des Institut Scientifique de Recherche Paranaturaliste*, Göttingen 2002, S.46. 越智和弘著、「脱肉体化時代の官能的思索 – ヴィレム・フルッサー論考 (1)」『言語文化論集』第36巻 第1号、名古屋大学大学院国際言語文化研究科、2014年、15頁。

- 2) 1939年にナチによる強制収容所送りを逃れ、プラハからロンドンに脱出する際に、唯一携行した本がヘブライ語の祈祷書とゲーテの『ファウスト』であったこと、そして『ファウスト』をどうしても手放したくなかった理由が、主人公のファウストではなくメフィストへの強い関心にあったことを、フルッサーはのちに自伝的著書のなかで回想している。Vilém Flusser, *Bodenlos*, Frankfurt am Main 1999, S.29.
- 3) Roger Caillois, *Der Krake – Versuch über die Logik des Imaginativen*, München 1986, pp.137-138.
- 4) Roland Barthes, *Michelet*, Frankfurt 1984, S.148.
- 5) Jules Michelet, *Das Meer*, Frankfurt / New York 2006, S.90.
- 6) Jules Michelet, a.a.O., S.111.
- 7) Michelet, a.a.O., S.146ff.
- 8) Barthes, a.a.O., S.139.
- 9) Barthes, a.a.O., S.151.
- 10) Barthes, a.a.O., S.139.
- 11) Barthes, a.a.O., S.152.
- 12) Barthes, a.a.O., S.139.
- 13) Barthes, a.a.O., S.139.
- 14) Barthes, a.a.O., S.225.
- 15) Barthes, a.a.O., S.225.
- 16) Flusser/ Bec, a.a.O., S.46.
- 17) Michelet, a.a.O., S.146ff.
- 18) Vilém Flusser, *Nachgeschichte – Eine korrigierte Geschichtsschreibung*, Frankfurt am Main 1997, S.12f.
- 19) Ibid.
- 20) Ibid.
- 21) Ibid.
- 22) Vilém Flusser, *Vom Subjekt zum Projekt. Menschwerdung*, hrsg.v. Stefan Bollmann u. Edith Flusser, Frankfurt am Main 1998, S.9.
- 23) Ibid.
- 24) *Ein Krakenblick auf die Postmoderne – Florian Rötzer im Gespräch mit Vilém Flusser*, in: Umbruch 2, Klagenfurt 1988, S.25ff.
- 25) Ibid.
- 26) *Ein Krakenblick auf die Postmoderne*, a.a.O., S.28.
- 27) Ibid.
- 28) Ibid.
- 29) *Ein Krakenblick auf die Postmoderne*, a.a.O., S.27.
- 30) Vilém Flusser, *Post-History*, Minneapolis 2013, S.166.『歴史後の世界』には、従来信頼されてきたドイツ語版に加え、ブラジル・ポルトガル語から最近翻訳された英語版が存在し、その内容には随所にドイツ語版とは大きく異なる箇所が顕在する。ここに引用した文章は、英語版からの翻訳であり、ドイツ語版には、そのままの文章は存在しない。さらにこれら二つの版に加え、筆者が2015年9月にベルリン芸術大学にあるフルッサー・アルヒーフにおいておこなった調査

の結果、『歴史後の世界』のドイツ語版には、さらに表現内容の大きく異なる別の完成された原稿が存在することも判明している。

- 31) *Ein Krakenblick auf die Postmoderne*, a.a.O., S.27f.
- 32) Ibid.
- 33) Flusser, *Post-History*, a.a.O., S.160.
- 34) Flusser, *Post-History*, a.a.O., S.160f.
- 35) *Ein Krakenblick auf die Postmoderne*, a.a.O., S.26.
- 36) *Ein Krakenblick auf die Postmoderne*, a.a.O., S.27.
- 37) Ibid.
- 38) Ibid.
- 39) このことについては、すでにドイツ語で発表した下記の拙論のなかでも取り上げた。Kazuhiro Ochi, *Vampyroteuthis in der desexualisierten Welt – Studie zu Vilém Flusser (1) –*, *Studies in Language and Culture Volume 36 Number 2*, Graduate School of Languages and Cultures, Nagoya University 2015, S.28ff.
- 40) Stephen Greenblatt, *The Swerve: How the World Became Modern*, New York/London 2011.
- 41) *Ein Krakenblick auf die Postmoderne*, a.a.O., S.27.
- 42) Ibid.